

■特別寄稿

徳之島公開講座開講講演
奄美方言からみた奄美の文化
木部 暢子（鹿児島大学法文学部）

1. 奄美文化の位置

1.1 大和文化と琉球文化の混ざり合う所

奄美は大和文化と琉球文化が混ざり合う所とよく言われます。例えば、奄美の祭や民俗を見てみますと、昭和51年に国の無形民俗文化財に指定された瀬戸内町の「諸鈍芝居」は、平家の落人、平資盛をまつたと言われる大屯神社で行われますが、上演される演目には、平敦盛をしのぶ「ククワ節(此处は節)」や『徒然草』の作者吉田兼好を題材とした「ケンコウ節」のように大和文化に題材を得た踊りがある一方で、「カマ踊り」のように琉球調の早いリズムの踊りもあります。

与論町の「与論の十五夜踊」(平成5年国無形民俗文化財指定)は、一番組の狂言と二番組の風流踊りとで構成されていますが、一番組の狂言は大和の能狂言に由来する踊りが中心で、二番組の風流踊りは琉球や与論島に由来する踊りが中心です。

沖永良部島「上平川の大蛇踊り」(昭和59年県無形民俗文化財指定)は、和尚と小僧の読経による大蛇の退散という筋書きからいって、中国あるいは大和の仏教説話の流れを汲むものと思われませんが、総踊りには琉球の民俗芸能の影響があると言います(『かごしま文化財事典』)。

このように、踊りの題材や様式を見ますと、上の3つの祭が大和の芸能と琉球の芸能の2つの流れを汲み、この2つをミックスさせたものであることは間違いありません。しかし、大和文化、琉球文化という時、それらはいったい、いつの時代のどのような文化を言うのでしょうか。

上の3つの例で言うと、大和風と言われる

ものは、じつはそんなに古くさかのぼるものではありません。例えば、源平の合戦は12世紀、吉田兼好は13～14世紀、京都で能狂言が確立したのは14世紀、仏教説話が能の題材に盛んに取り入れられたのも14世紀です。これらの大和風の芸能は、おそらく薩摩の影響が強くなる中で、薩摩を通して奄美に取り入れられたものではないかと思われま

す。一方、琉球文化がどういうものを指すかというところ、大変難しいところがあります。もし、「琉球文化＝琉球王朝文化」という図式で捉えたとするならば、琉球王朝の成立は15世紀ですから、そう古くはさかのぼらないこととなります。しかし一般には、琉球王朝成立以前の琉球各地の文化を含めて、琉球文化と言うのではないのでしょうか。奄美に影響があるというときの琉球文化も、琉球王朝以前の琉球各地の文化を指しています。

そうすると、奄美の文化は、まず琉球王朝成立以前の琉球各地の文化の影響を受け、これをベースとしながら、その後14世紀以降の京都を中心とする大和文化の影響を受け入れて、両方をミックスする形で作り上げられたものということになります。

1.2 さらに古い文化圏へ

しかし、では、奄美が古く影響を受けた琉球文化とはどのようなものだったかと考えてみますと、じつは、大和文化、琉球文化という区別自体が無意味なのではないかという気がしてきます。その具体的な例を平成13年に県の無形民俗文化財に指定された「徳之島町井之川夏目踊り」に見ることができます。

『かごしま文化財事典』によりますと、この祭の特徴は踊りの集団が集落中の各戸をくまなく回って踊る、いわば訪問祝福型の踊りであること、男性集団と女性集団の掛け合いによって踊りが展開されること、歌と踊りと楽器が三位一体の関係にあること等にあり、これらはいずれも、わが国の最も古い芸能の形態を留めていると言います。このうち二番目の特徴に注目してみましょう。

二番目の特徴は、じつは古代の歌垣うたがきに通ずるものです。歌垣いちというのは、奈良時代、男女が野辺や市などに集まって、歌を交わしたり踊りを踊ったりする行事のことで、男女の求愛の場ともなっていました。万葉集や常陸国風土記などを見ますと、大和の海柘榴市つばいぢ（現在の奈良県桜井市にあった市場）や常陸国（現在の茨城県）筑波山で歌垣が行われていたことが分かります。おそらく古代には、もっといろいろな場所で歌垣が行われていたのではないかと思われます。平安時代に入りますと、歌垣は宮廷に取り入れられ、中国の踏歌とうか（足で地を踏み、拍子をとって歌う群集舞踏）と合流して、新年に行われるようになりました。踏歌はその後、だんだんに行われなくなり、現在は熱田神宮（愛知県）に神事として伝えられています。

この他に奈良時代の歌垣の流れを汲むものとして、沖縄の毛遊びもうあしがあります。沖縄では現在でも各地で野外コンサートの形で毛遊びが行われていますが、もとは男女が毛（野外）で円陣を組み、歌ったり踊ったりする行事が毛遊びでした。さらに、中国南部、ベトナム等のインドシナ半島北部の諸民族にも、歌垣と似たような風習があります。

このような例を見ますと、大和文化、琉球文化といっても、古くさかのぼれば両者には共通する部分が多く、元は同じという感じがします。さらに、その広がりには中国南部、東南アジアにも及ぶようです。そうすると、大和も琉球も、元は東南アジア文化圏といった

大きな文化圏の中にすっぽりと包まれ、その中でいろいろな地域同士が、いろいろな影響を与えあいつつ、現在に至ったという歴史が見えてきます。

2. 奄美方言の特徴

次に、方言から奄美文化の特徴を考えてみますと、さきほど申し上げた芸能と似たような事情が方言にも当てはまります。すなわち、奄美の方言は、古くは琉球のことばと共通のベースを持っていましたが、その後、薩摩の影響を受けて、両方をミックスさせた形で現在に至りました。しかし、古くさかのぼれば、大和のことばと琉球のことばは共通する部分が多くなってきます。つまり、両者の元は同じであると考えられるのです。

発音面の話はすでに『AMAMI News Letter』No.11、No.12に書きましたので、ここでは単語の例を挙げておきましょう。表1に挙げた語は沖縄方言と共通する単語で、現在の共通語では使われないものです。ただし（古）の注記からも分かる通り、昔は京都でもこれらの語が使われていました。一方、表2は鹿児島由来の単語です。これらはおそらく、江戸時代以降、薩摩から奄美に入った単語だと思われます。

表1（（古）は古語として使われたもの）

あご	ウトウゲ	(古) おとがい
朝	スカマ	
朝	ツトゥミティ	(古) つとめて
足	ハギ、ハジ	(古) はぎ (脛)
明日	ナーチャ	
小豆	ハーマミ	あかまめ (赤豆)
頭	カマチ	
頭	チブル	(古) つむり
兄	ヤクムイ	(古) きみ (君)
家	ヤー	(古) や
腕	ケーニャ	(古) かいな

男	インガ	
女	ウナグ	(古) おなご
蚊	ガジャン	
かかと	アドウ	
釜	ハガマ	(古) 羽釜
髪	カラジ	
北	ニシ	
去年	フズ	(古) こぞ
櫛	サバキ	(古) 髪をさばく
子	クー	
子ども	ワラビ	(古) わらべ
砂糖	サタ	
塩	マシュー	ましお (真塩)
三味線	サンシン	
雀	ユムンドウイ	
空	ティン	てん (天)
台所	トグラ	
太陽	ティダ	てんどう (天道)
卵	クガ	
父	ジュウ	
蝶	ハビラ	
妻	トゥジ	(古) とじ
つむじ	マチジ	巻き毛
梅雨	ナガミー	(古) ながあめ
友だち	ドッシ	(古) どし (同士)
匂い	ハザ、カザ	(古) かざ
苦瓜	ゴーヤ	
西	イー	陽の入り
虹	ノージ、ノーギ	
母	アンマ	
腹	ワター	はらわた
火	マチ	たいまつ
東	アガリ	陽の上がり
東風	クチ	(古) こち
膝	ツイブシ	(古) つぶふし
臍	フス	(古) ほぞ
人	チュー	ひと
豚	ワー	
へちま	ナーピラ	
蜜柑	クネブ	九年母
右	ニギリ	握り

南	フェー	はえ
娘	メーラビ	(古) めわらべ
肋骨	ソーキンブヌィ	

表 2

頭	ビンタ	(鹿) びんた
桶	タング	(鹿) たんど
ご馳走	シューキ	(鹿) しおけ (塩気)
錐	イー	(鹿) イー
青年	ニセ	(鹿) にせ (二才)
父	チャン	(鹿) ちゃん
鉄瓶	チュカ	(鹿) ちょか (猪口)
母	オッカソ	(鹿) おっかん

3. 奄美方言の保存

奄美方言は、一方で大和語の古語をよく伝え、また一方で琉球語と薩摩語を取り入れたりして、豊富な表現を作り上げています。しかし、現在、方言は消滅の危機に瀕しています。これを何とか残そうと、平成になった頃から、島口大会や島ゆむた大会が開催されるようになってきました。子供たちのしゃべる方言は、大人の耳からすれば、正しくない方言かもしれませんが、そのような方言でも、全く残らないよりは、残った方がよいと私は考えます。ただ、これに関しては、いろいろな考えの方がいらっしやるだろうと思います。

ところで、2006年3月に天城町の岡村隆博さんたちの努力が実って、『徳之島方言二千文辞典』が刊行されました。この報告書の良いところは、単語だけではなく、方言の会話文が載せられているところです。共通語を元にして岡村さんが天城方言に訳されたのだそうで、ゆくゆくは岡村さんご自身の発話を吹き込んだデジタル方言辞典が公開されるそうです。以下に一例を挙げておきましょう。

- (1) イエーとうんがネエー 見(にゃー)ゆい。
(瘦せているように見える) (0100)

- (2)なースキぐん 島(スキマー)ぬ 見
(にゃー)ゆんどー。(もうじき島がみえ
るぞ) (1126)
- (3)からースキぬ 病みゆい。(頭が痛む)
(0118)
- (4)ネキーぐツキぬ 病(や)みゆんテキーわ
やー。(みずおちが痛むなあ) (0056)
- (5)用事(ゆースキ) 済まーチキ、まどうー
ぬ 有ーテキか 着物(きん)見(にー)
が 行きゆいよー。(用事を済ませて、暇
があったら着物見に行くよ) (0279)
- (6)くルキかー 発展シキー行きゆん 国ー
だー(これから発展していく国だ) (0629)

これを見ると、奄美方言では「見ゆい・見
ゆん」、「病みゆい・病みゆん」、「行きゆい・
行きゆん」のように、動詞の活用形の種類が
多く、表現が豊かであることが分かります。
言うまでもなく、共通語にはこんなに多くの
活用形は存在しません。

このような仕事は、地元の方と研究者が協
力し、それぞれの特徴を出し合って初めて完
成する仕事です。今後、奄美の方々と鹿児島
大学の教員との間でも、このような共同作業
が盛んに行われるよう、私どもも努力してい
くつもりでございます。徳之島の方とも是
非、協力しあってまいりたいと思いますの
で、どうぞよろしくお願い致します。

参考文献

- (1)岡村隆博・沢木幹栄・中島由美・福嶋秩
子・菊池聡 2006『徳之島方言二千文辞典』
信州大学人文学部
- (2)鹿児島県教育委員会 2002『かごしま文化
財事典』
- (3)飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編 1984『講
座方言学 沖縄・奄美の方言』国書刊行会
- (4)上村孝二 1998『九州方言・南島方言の研
究』秋山書店
- (5)木部暢子 2004「奄美の方言」『AMAMI

News Letter』No.11

- (6)木部暢子 2004「奄美の方言(2)」『AMAMI
News Letter』No.12
- (7)木部暢子 2005「奄美の方言(3)」『AMAMI
News Letter』No.22
- (8)近藤健一郎 1999「近代沖縄における方言
札(1)ー八重山地域の学校記念誌を資料と
してー」『愛知県立大学文学部論集』47
- (9)中本正智 1976『琉球方言音韻の研究』法
政大学出版
- (10)西村浩子 1998「奄美諸島における昭和期
の『標準語』教育」『松山東雲女子大学人
文学部紀要』6
- (11)西村浩子 1999「徳之島における方言継承
の問題」徳之島郷土研究会報 24
- (12)平山輝男編・木部暢子鹿児島県編 1997『鹿
児島県のことば』明治書院
- (13)前田晶子 2004「離島における地域の人間
形成と学校ー沖永良部島・国頭小学校の
1970年代ー」『AMAMI News Letter』No.8